

# 武蔵国分寺跡資料館だより

Musashi Kokubunji Temple Remains Museum Newsletter

編集・発行・印刷

見る／学ぶ／訪ねる／  
武蔵国分寺跡資料館

Musashi Kokubunji Temple Remains Museum

【住所】 〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10

【電話】 042-323-4103 【FAX】 042-300-0091

【E-mail】 museum@city.kokubunji.tokyo.jp

【HPアドレス】

http://www.city.kokubunji.tokyo.jp/shisetsu/kouen/1005196/1004239.html

2022.2  
第47号



## 国登録有形文化財 沖本家住宅洋館・和館



洋館外観

国分寺市内藤2丁目<sup>おきもと</sup>に所在する沖本家住宅洋館・和館が、令和3年(2021)10月14日に国の登録有形文化財となりました。

昭和8年(1933)に洋館が、関西を拠点とする貿易商の土井内蔵<sup>くら</sup>の別荘として建てられました。設計は土井内蔵の甥にあたる川崎忍です。川崎忍はカリフォルニア大学で建築を学び、旧松本邸(宝塚市・登録有形文化財)、日本基督教団本郷中央教会(中央区・登録有形文化財)などを設計しました。

昭和12年(1937)に沖本至<sup>おきもといたる</sup>に譲られました。昭和15年(1940)には沖本至によって和館の増築が行われ、洋館とは渡り廊下によってつながっています。



洋館玄関

### 洋館

- 外壁 <sup>したみいたば</sup>下見板張り  
黄土色の<sup>か</sup>掻き落とし(南面2階・玄関ポーチ上部)  
屋根 <sup>はんきりつまやね</sup>半切妻屋根造銅板(現在はガルバリウム鋼板)  
横一文字葺き  
小屋組み 2階天井裏でキングポストトラス  
内装の左官仕上げの壁は、アメリカで流行していたクラフトテキスに似せて作られています。また、梁や柱、玄関ドア、作り付け家具、いくつかの造作された置き家具に共通して幾何学の彫り装飾文様が施されている点も特徴的です。



### 和館

- 外壁 <sup>おしぶち</sup>押縁下見板張り  
<sup>しつくい</sup>漆喰の左官仕上げ(一部)  
屋根 <sup>いりもや</sup>入母屋造の<sup>さんがわら</sup>棧瓦葺きで北側は切妻  
小屋組み 天井裏で和小屋

洋館の食堂より渡り廊下で繋がり、独立した玄関を持ちません。<sup>ひろえん</sup>広縁からサンルームまで全て中棧のない一枚の大きなガラス戸が贅沢に使われています。接客用の座敷の続き間には、上質な材料を使用しています。随所に工夫を凝らした意匠が散りばめられています。



※登録有形文化財とは国の文化財登録原簿に登録された文化財のことです。従来の指定文化財のような保護のために厳しい規制をかけるのではなく、活用しながら守って行くための制度です。

沖本家住宅では所有者が建物の一部を活用し、カフェを営業しています。

(中野 純)

## 近代和風建築等総合調査事業（西部）

これまでの国分寺市内の建造物の調査は、網羅的ではなく対象を絞った調査として行ってきたため、たとえば沖本家住宅（1頁）は把握できていませんでした。そのため市内全域での把握のための調査が必要であることが明らかになり、実施することとしました。対象は昭和39年（1964）を基準年として、それ以前に建てられた建造物としました。基準年の設定にあたっては国の有形文化財（建造物）は登録要件として建築から50年を経過していることが挙げていること、更に国分寺における市制施行の年であり、前回の東京オリンピックの開催年でもあることから昭和39年としました。

令和元年度には**基礎調査**として、地図・航空写真などから基準年以前に建てられた建物がどの程度残っているのかという調査を行ったところ、対象は3930件であることが分かり、市全域に散在していることも分かりました。

令和2年度からは**1次調査**として市域を3分割した西部で実施しました。調査は現地へ出向き、可能であればお住まいの方にお話を伺うという計画でしたが、新型コロナウイルスの蔓延により何度も緊急事態宣言が発令され、計画通りの調査を行うことはできませんでした。そのなかで出来る限りの記録をとるという方針で調査を行った結果が今回の報告となります。なお聞き取りにご協力いただいた中では、「この家で前回の東京オリンピックを見た」といった家の建てられた時期とその思い出を結ぶお話を伺うことができました。

今回の調査で基準年以前に建てられたと判断できた建造物は308件でした。正確な年代を確定できていないものが多いため、統計的な整理は難しいのですが、おおよそ把握できたものについて6つの時代区分で整理しました。また建造物の特徴は、用途、和風か洋風か、構造に加えて、壁材、屋根葺き材と形状、窓などの開口部の素材について調査し、上位2つをその時代の特徴として記載しました。「対象・詳細不明」は基準年より前ではあることは確認できている建造物です。このグループの特徴は「市制前」と同じ傾向があることから、多くの建造物が年代も「市制前」と同じ時期である可能性が高いと考えられます。

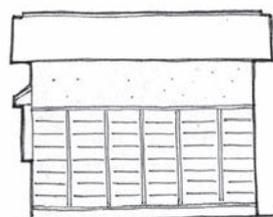
右側3ページの地図では○は個人住宅、□は集合住宅と店舗・事務所と併設した住宅、△はその他（倉・寺院・神社・事務所）として、時代を色分けで示しています。個人住宅が多い地域であり、その中に少しだけ他の用途の建造物が入っていることが分かります。

表のとおり個人住宅が多く、全ての年代を通じて和風の木造建造物が主体となっています。変化があるのは壁材・屋根材・屋根形状・開口部です。**壁材**は上部が漆喰などの塗壁で下部が板壁という作り方が多く見られ、そのうち板壁は横向き（図①）から縦向き（図②）、へという変化が見て取れます。そののちに塗壁がモルタルへと置き換わっていきました。**屋根材**については、金属葺から瓦・瓦棒葺（金属葺の一種・図③）へと変化していったようにも見えますが、寺院・神社が金属葺であるため、用途による違いというべきかもしれません。**屋根形状**については切妻（図④）が全ての時代でよく採用されていますが、戦前中までは入母屋（図⑤）も見られます。戦後になってから寄棟（図⑥）が多くなります。また陸屋根は団地などで見られる平らな屋根のことです。窓や玄関といった**開口部**は、大きくは木製から金属製へと変化していますが、当初木製だったものがアルミサッシなどに改修されている例が多く分析には注意が必要です。

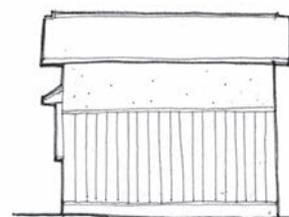
今回の調査では現状の記録を行ったため、建てられた当初の状況ではなく建造物の使われ方や修繕の傾向が見えてきました。また水路や昔からの道沿いにあった農村集落が、住宅地へと変化していく過程では国立駅に近い所から開発が進む一方で、駅から離れた場所でバラバラに開発が行われた様子分かってきました。今後は1次調査の結果をふまえて、個別の建造物に対する調査も検討しています。

最後になりましたが、今回の調査では建造物のご所有者様を中心に大変多くの方にご協力を頂きました。本当にありがとうございました。

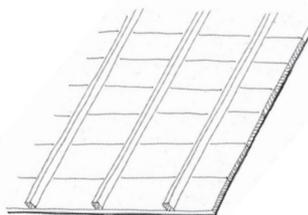
（文：中野 純 調査：有限会社アルケーリサーチ）



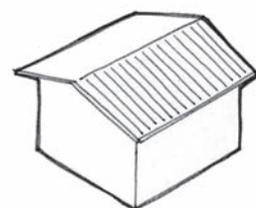
図① 横向きの板壁



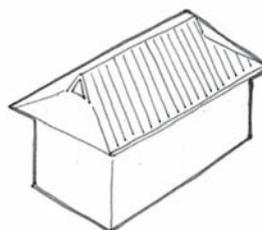
図② 縦向きの板壁



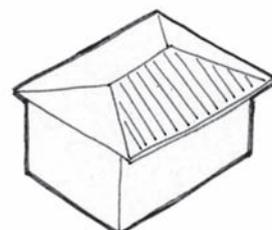
図③ 瓦棒葺



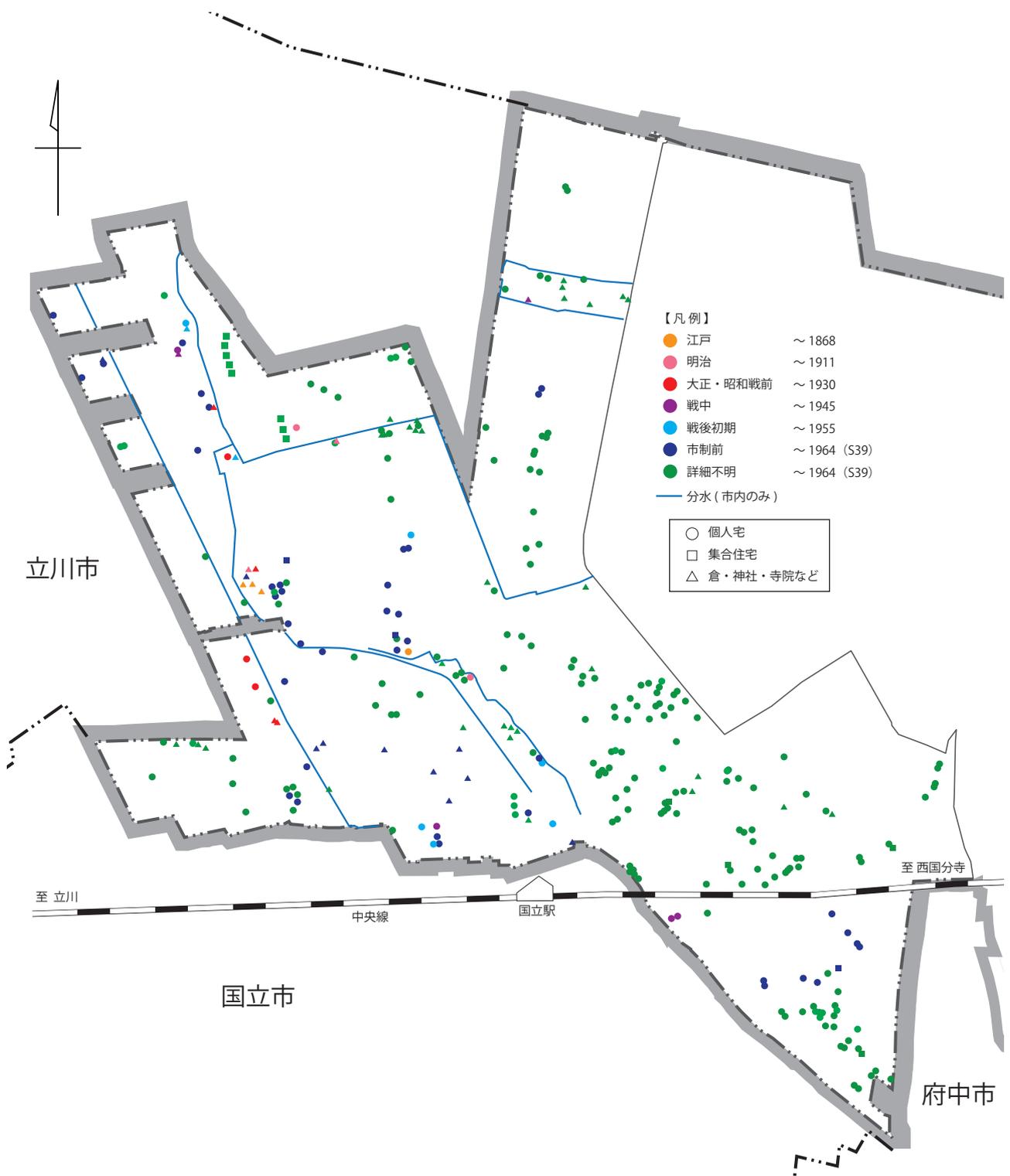
図④ 切妻



図⑤ 入母屋



図⑥ 寄棟



時代	用途	和/洋	構造	壁材	屋根材	屋根形状	開口部
江戸 (~1868)	寺院・神社	和	木造	塗壁・板	金属葺	※特徴なし	木
明治 (~1911)	神社・倉	和	木造	板(横)	金属葺	切妻	木
大正・昭和戦前 (~1930)	神社・個人住宅	和	木造	トタン	金属葺・瓦	切妻・入母屋	木・金
戦中 (~1945)	個人住宅	和	木造	塗壁・板(横)	瓦・金属葺	切妻・入母屋	木・金
戦後初期 (~1955)	個人住宅	和・複合	木造	板(縦)・塗壁・モルタル	瓦・金属葺	切妻	木・金
市制前 (~1964)	個人住宅・事務所	和・複合	木造・RC造	塗壁・モルタル・板(縦)	瓦・金属葺	切妻・(寄棟・入母屋・陸屋根)	金・木
対象・詳細不明 (~1964)	個人住宅・倉庫	和・複合	木造・RC造	塗壁・板(縦)・モルタル	瓦・瓦棒葺	切妻・(寄棟・入母屋・陸屋根)	金・木

## 「西元町万葉公園」開園のお知らせ



西元町万葉公園周辺の発掘調査状況

### 来館者数

2009年10月18日～2021年11月末日

来館者数累計 148,794 名

多くのご来館ありがとうございました

【8月～11月の学校見学】

	学校数	人数
小学生	6	482
高校生	1	4
大学生	1	20

○来館者数は、おたかの道湧水園の入園者数

月	来館者数	開館日数
8	599	26
9	835	26
10	1,347	27
11	1,661	25
計	4,442	104

長らく「国分寺プレイステーション・西元町ゲートボール場」として、地域の皆様の憩いの場所でした武蔵国分寺七重塔の東側近接地で、このほど宅地開発に伴う事前の発掘調査を実施し（第762次調査）、平安時代の竪穴住居12軒・土坑17基・ピット18基のほか、縄文時代の土坑3基（陥し穴）等が発見されました。

天然痘の大流行をはじめ様々な世情不安を仏教の力で鎮めるため、天平13年（741）に発布された国分寺建立の詔により作られた武蔵国分寺は、本誌第21・43号でもご紹介しましたように、承和2年（835）の火災で七重塔が焼失し、その10年後、前男衾郡大領の壬生吉志福正によって再建されますが、元慶2年（878）に関東諸国を襲った地震でも大きな被害を受けたことが判明しています。

当初は、金堂・講堂・塔など主要な堂舎の近くに竪穴住居はまったく存在していませんでしたが、七重塔から北東へ約130m離れた発掘調査地点では、元慶地震直後の9世紀末～10世紀初頭、そして10世紀末～11世紀後半の時期に営まれた住居跡群が広がっていることが明らかとなりました。国分寺が造営されたばかりの天平年間（8世紀中頃）と平安時代中頃では、寺院をとりまく景観が大きく変化していますが、このような現象がなぜ生じているか直接的な要因は必ずしも明確ではありません。

現在、住宅が立ち並ぶ敷地の一面には、万葉集に謳われた植物を配し、遺跡の発掘調査成果と万葉歌の案内板を設置した「西町万葉公園」が完成しました。史跡の散策とあわせて、憩いの場としてご利用ください。（依田亮一）

### 武蔵国分寺跡資料館ご利用案内

※新型コロナウイルス感染症対策のため、マスクの着用・手指の消毒などにご協力ください。



交通のご案内 ※駐車場はありません

【電車】○JR国分寺駅下車／徒歩約20分 ○JR国分寺駅下車／徒歩約15分

【バス】○国分寺市循環バス『ぶんバス』万葉・けやきルート「史跡武蔵国分寺跡」下車／徒歩約8分

○国分寺市循環バス『ぶんバス』日吉町ルート「泉町一丁目」下車／徒歩約8分

○国分寺駅南口より「京王バス」系統番号〈寺83〉・〈寺85〉乗車「泉町一丁目」下車／徒歩約8分

#### ■開館時間

午前9時～午後5時（入館は午後4時45分まで）

#### ■休館日

毎週月曜日（祝日・振替休日の場合はその翌日）

年末年始（12月29日から1月3日まで）

※展示替えなどで臨時休館することがあります。

#### ■入園料

資料館に入館するには「おたかの道湧水園」への入園料が必要になります。（入園券は史跡の駅で販売）

一般……………100円（年間パスポート1,000円）

中学生以下……………無料

【入園料の減免規則があります】

- 学校の教育活動で生徒（中学生を除く）、学生及び引率の教職員が入園するとき〔事前（5日前まで）に減免申請書の提出が必要です。〕
  - 身体障害者及びその介護者が入園するとき〔発券窓口の史跡の駅で身体障害者手帳等の提示が必要です。〕
  - その他教育長が特別の理由があると認めるとき〔事前（5日前まで）に減免申請書の提出が必要です。〕
- ※減免申請書は、国分寺市のホームページからダウンロードできます。



ホームページQRコード